

八中2年人権だより

徳島市 八万中学校
2年生 第23号
2024年 3月18日
編集・文責 吉成正士

(第22号からのつづき)

あの風景が、あの視線が、忘れられない

■私は第4回学年全体人権学習に参加して思ったことがあります。それは、もう3年生になるんだということです。ということは、私はもう2年もこの人権の学習をしてきたのだと実感しました。

この2年間、吉成先生の人権に対する学習を受けてきて、本当に身についたのか、今につながっているのかを考えていました。ときどきファイルを見返して思うことがあります。「忘れていたな」「あれ？これ、やったっけ…」。あんなに真面目に考えていたのに、感想まで書いたのに、1年経つと忘れていました。これでは意味がない。あの大切な時間がもったいない、と思いつつも、思い出せません。「記憶力が悪いのかな」と思ったけれど、心の底から大切だと思っていないのだと分かりました。自分の考えを口にしないから覚えてないんだと思いました。そして今回、初めてマイクをもちました。全然緊張しなかったけれど、いざしゃべるとなると分かりました。今まで自分が見ていたあの風景が、あの視線が、自分の方に向いていました。びっくりです。この経験は忘れられません。

2組MN

人は忘れる生き物です。

私がまだ若かったころは、どうして？と、腹立たしさも、悲しみも、悔しさも、すべてありました。どうすれば記憶に残るのか、と考えては実践し、考えては実践しました。でも、思ったのです。そうだ、人間は忘れるんだ、と。そういうものなんです。



でも、忘れにくいこともあります。それは、あまりにも強烈な記憶。それと、ぼんやりとイメージだけが残る記憶。おそらく皆さんのなかには、そのどちらもが今残っているのではないかと思います。大勢の前でマイクを持ってしゃべったという、実際に汗をかいた強烈な記憶。それと、「具体的なことは覚えてないけど、熱心に人権学習やったなー」という、ぼんやりとしたイメージの記憶。

でもそれだけでは確かにもったいないですよ。だから忘れっぽい私は、忘れないために、覚えていられるように、毎日毎日人権に関する新聞を貼りながら、繰り返し繰り返し学び直しをしているのです。

今度こそ！

■私は水平社にかかわる人たちと自分を照らし合わせると、自分は「差別をなくしていきたい」と口にはしているだけで、行動や周りに伝える勇気が全然ないと思いました。水平社の人たちは自分が部落であることを打ち明け、差別に立ち向かっています。房好さんは叔父がハンセン病患者だということを家族に秘密にしていたけど、それは家族を守るためだったと思います。でも、もし私が親からそのことを打ち明けられたら、びっくりするし、すごく複雑な感情になる気がします。

自分の1年を振り返って、何回も人権学習をしてきたけど、身についているのは部落差別やハンセン病などの大まかなものばかりでした。それは吉成先生が言っていた、燃やし続ける人権学習とは全然違うもので、すごく後悔しています。来年もし人権学習があるのなら、今度こそ真面目に取り組んでいきたいと思います。 5組KH

行動に移せた方がいいに違いありません。立ち上がる人がいなければ、前進はありませんから。でも、今咲かなくてもいいんです。咲くように頑張ってきたつもりではありますが、花の咲く時期は様々です。色も違えば、大きさも違います。今咲かなくても、1年後、5年後、10年後に咲くかもしれません。そのときに私はもういませんが、いつか咲く可能性もあるということ、これまでの教え子たちは教えてくれました。

「植えて見よ、花の咲かぬ里じゃなし」

私の好きな言葉です。信じて種を蒔き、水をやり、陽を照らし、あとは信じてじっと待つ。芽が出るまで。



私を知ってもらいたい

■今回もたくさんの発表者がいて、改めて人権委員会さんのアイデアは凄すぎると思った。水平社の人たちのように、人権委員の皆さんも人権学習をより良いものにしようと声をあげた。誰かが言うことで、伝染して言える空気ができていくように感じた。発表者の人何人かが、「勇気をもって立ち上がってすごい」「自分にはできない」と言っていたけど、「発表するのも勇気がいるし、凄いことやん！できてるよ！」って言ってあげたかった。最初は自分の気持ちを話すことにとても緊張したし、不安だった。でも何回

か発表を重ねるうちに、思っていることを聞いてほしい！
と思うようになった。これは中学2年生になって成長したこ
とだ。自分を話すことは難しいことだけど、必ず自分にと
って宝物になる。人権学習じゃなくても、家族や友達、先
生にでも、自分を話せる人をつくって、私を知ってもらいた
い。

4組MC

入試にも就職試験にも面接があります。

昔教えた中学生で、高校入試を推薦で、大学入試も推薦で入学した生徒がいました。推薦には面接がありました。その生徒は、皆さんがしているような人権学習で、繰り返し繰り返し発言をしていた子でした。自分の思いを伝えたい、聴いてほしい、そして対話を通じて人とつながることの楽しさをよく知っていた子でした。だから面接も自ずと、楽しめたと思います。

差別をなくしていくには、この対話力が必要になってきます。どんな人とも関係性を築ける力です。でないと、相手に自分の思いを伝えることはできませんし、聞いてもらうこともできません。だから、どうしても必要な力なのです。でもそれは、差別をなくしていくときだけに使うものでもありません。皆さんが進路選択に迫られたとき、家族や先生に相談するときにも必要となってきます。さらに言うと、今後の人生においてずっとずっと必要であり、有効な力になってきます。



人に自分を分かってもらおうとすると、自分の思いを語ること、それに尽きると思います。入試のときの面接も、「もっと聞いて！」と思える人も出てくるのではないのでしょうか。

ちなみに先に述べた生徒ですが、大学後は教員採用試験に現役合格し、現在は高校で働いています。

大切なことは、思いを伝えようとする気持ち

■水平社とハンセン病について学習を重ねてきました。そのなかで痛感したのが、「ものが言えない社会」の恐ろしさです。「父が隠した“家族”」でも父はハンセン病の叔父さんの存在を話していませんでした。周りからどう思われるか分からない、家族を守るためであっても、事実を隠さなければならないことで、「ものが言えない社会」のつらさに気づくことができました。

今の時代は「寝た子を起こすな」と、様々な人権問題にふれてはいけな
い、タブーという空気があるように思
います。このままだと社会がどんどん語り合うことができない
環境をつくっていくような気もします。だからこそ、今から
人権問題についての正しい知識をつけ、人の前でも自分の
意見を伝える練習をしていきたいです。常に堂々とした
態度で、上手に話す必要はないと思います。誰かに思い

を伝えようとする気持ちが大切なのではないでしょうか。

3組YA

現代社会は、思っていること、苦しい思いがあるにもかかわらず、それが言えない、相談できない社会になっていることが孤立化につながっているように思います。そうじゃなくて、ひとこと相談できる、不安を伝えられる社会に変えられたらと思います。それがどれだけ安心できる社会につながるか。

皆さんの、この学年の関係性にしても同じです。互いの思いを伝え合える関係性になっていくこと、その延長線上にあるのが、そんな社会でないかと思います。上手に伝えられなくて構いません。とつとつと、言葉にならない言葉で構いません。むしろその方が、その人の思いは伝わるのではないのでしょうか。互いの思いを伝え合うことです。それが、この社会を変えていく原動力になるのだと思います。

信頼しているから発表できる

■私はこの人権学習で、人権意識が高まった気がします。また発表することで、深く考えることができるのではないかと感じました。私が今回発表できたのは、この学年の人たちを信頼しているからです。「発表する」ことは不安で、少し怖い。でも、自分を語らないと何も始まらないと思
いました。そして、自分の意見、周りの意見を大切にしてい
くことで、より良い人権学習になるのではないかと感じ
ました。

また、「恥ずべき、隠される命はない」「すべての命はみんな等しく尊い」本当にそうだと思います。自分と違う、周りと違う、それだけで判断し、差別するのはおかしいと思
います。でも人は無意識に差別するかもしれません。自分も気づかないうちにしているかもしれない。だから、差別を見かけたら注意し合える関係、雰囲気をつくっていけ
たらと思いました。そして、この人権学習をできるのは当
たり前ではないとあらためて感じました。(先生たちには本
当に感謝しています！)この一つ一つの学習を大切に
して、「一時」ではなく、これからも学び続けていきたいです。そして、自分を語りたいです。

4組MC

「信頼しているから」…信頼関係で成り立つ関係を、この学年につくっていききたい。ずっとそう思い願ってきました。今回、皆さんが語り合ってるなかで見られたいくつかの涙が、それを物語っているように感じました。今、ようやく、スタートラインに立ったのかもしれませんが。これまでは、そのための長い長い土台作りだったのかもしれませんが。私たちの本当の人権学習は、今から始まるのです。(おしまい)

